慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	矢数四郎氏提出学位請求論文：日本における後世派医学史の研究：曲直瀬道三及びその学統
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1981
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.1/2 (1981. 6) ,p.242- 244
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報 学位論文審査報告
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19810600-0242

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

に指摘していることも、それによって柳田史学を継ぐ者の道を照らしていることも、高く評価される。また、現在、事件史と構造史の対立を媒介するものとしての著者の主唱する社会史の方法が日本の歴史学界をリードしているのを見ても、本書は著者ひとりの仮説ではなく、普遍的な妥当性をもっていることが明らかである。この理論書は、数十年に及ぶ著者の歴史研究が厚い下地になって、その常民史観の情念を緻密な理論に体系化することに成功している点、歴史家の書いた理論書としてこれだけ精緻なものもなく、学位を得るに十分の労作であると認められる。

昭和五五年九月二六日

論文審査担当者

主　査　慶応義塾大学文学部教授　神山四郎
副　査　慶応義塾大学名誉教授文学博士　池田弥三郎
慶応義塾大学文学部教授文学博士　清水潤三
慶応義塾大学文学部教授　河北展生

矢数四郎氏提出学位請求論文

日本における後世派医学史の研究
―曲直瀬道三及びその学統―

本論文は東洋医学者として令名のある著者が旁ら力を注ぎつづけてきた後世派を中心とする東洋医史学に関する積年の研究成果を集大成したものである。

本論文は、序章を含めて本論三章に関連の論考を収めた付章を加えた全四章で構成され、これに著者の校訂によって影印翻刻された三冊の資料が参考として添付されている。

本論文の内容を要約すると、まず序章「日本における東洋医学の展開と後世派医学の特質」において、中国医学の伝来から西洋医学法制下の存続と復興におよぶ漢方医学の歴史を概観(第一節)したうえで、本論文が主題とする後世派医学（金元李朱医学）の特色とその歴史上の位置を述べている。すなわち、陰陽思想にもとづく陰証・陽証の形と虚証・実証の質との相待説、五行の思想にもとづく五臓の相生・相剋説の説明から始めて、後世派医学の特色である気象病理学としての運気論、薬物の経絡に対する選択的作用である引経報使の論、および配剤の規則を示す君臣佐使・子母兄弟の説について解説し、要するに金元医学が虚証に対する温補の医術を主とするものであり、それは栄養不足・精神不安な戦乱時代の条件に適した効果的な医療であったと説くとともに、平和時代の攻撃的な古方医学への推移を展望している（第二節）。

ついで第一章「後世派医学の受容と発展」では、第一節で、明に留学して金元医学を学んで日本に導入した田代三喜を取りあげ、その伝記とともに、著述と臨床について検討している。とくに著者が発見した『三帰回翁医書』を、それまで断片的にしか知られなかった三喜の著書の集大成である『三喜十巻書』に相当するものと推定して、その内容を紹介している。その第六巻『薬種隠名』の出現によって、他の諸巻にすべて作字で表記されているために、これまで解読不能であった配剤の実体を知ることができるようになったのは、三喜の研究に新生面をひらくものであり、

著者はその処方がことごとく簡易であるところから、三喜が室町末期の関東武士・農民を済生した徹底した臨床家であったと推定している。同時にこれまで初代曲直瀬道三に始るとされてきた小児科の専門化が、すでに三喜によって始められていたこと、また難解な中国医書を分りやすく表示する科疎の方式の採用、灸書の著作など、初代道三に継承される諸側面が具体的に解明されている。

第二節「曲直瀬道三」と第三節「曲直瀬道三雑考」は、後世派医学中興の祖といわれる初代道三（一渓）に関する研究で、長短十五篇の論稿が収められている。その重点の一つは伝記の考証にあって、京都十念寺所在の基碑によって、没年を文禄三年と確定したのをはじめ、従来の道三伝の誤りを多く訂正し、新たに詳細な年譜を作成している。それと並んで、李朱医学の立場と臨床体験のうえで、古今の医書を抄録分類し体系化して簡潔に表示し、診療の全書とした主著『啓迪集』をはじめとする道三の多数の著書を検討解説するとともに、学舎啓迪院における教授や「切紙」の伝授にみられる門人育成の事績を通して、医学を仏教から独立させ、李朱医学を日本化した道三流医学の全容を描きだすことにつとめている。

第二章「曲直瀬道三の学統」は、初代道三の医学の継承発展を扱うが、第一節「曲直瀬玄朔」がその中心をなしている。著者は二代目道三（玄朔）についても、その伝記を考証して詳細な年譜を作成しているが、最も力を注いでいるのは、『医学天正記』の研究である。天皇・将軍・諸大名から庶民にいたる数多くの臨床例を、本名をあげて記録したこの書について、著者は異本を検討するとともに摘録註釈を加えることによって、玄朔の診察法、治療体系を解明し、また朝鮮役における従軍の事績などを明らかにしている。なお、第二節「曲直瀬道三と玄朔の門人」には初代道三の孫女が再婚した寿徳院曲直瀬玄由家の考証と、玄朔の門人野間玄琢の年譜墓所に関する論考を収めている。

付章は折衷派の大成者多紀元簡の事績・著作とその中国医学界への影響を説いた「桂山多紀元簡の偉業」（第一節）、明治年間の漢方存続運動に一身を捧げた浅井国幹を生んだ尾州藩医浅井家（後世派）の事績（第二節）、および存続運動のなかで、京都跡尋社に拠って独自に活動した吉益東洞の後裔吉益鉄太郎（古医方）の伝記などを収めていて、著者の医史学研究の拡がりと方向を示している。

大要以上のような内容をもつ本論文は、田代三喜の十巻書の発見紹介、今大路家と曲直瀬三家の関係の解明、『医学天正記』の研究、後世派医学者の道統系譜の作成をはじめとして、日本医史学への大きな寄与をなすものであり、漢方医学者である著者にしてはじめて可能であった部分にとくに特色がある。参考として添付された三喜・道三（一渓）・玄朔の著書の翻刻も、今後の医史学究研への基本史料を提供する貴重な業績である。もっとも、本論文について不満がないわけではない。個別に発表された論稿を集大成された当然の結果とはいえ、叙述に重復が多く通読をさまたげるのは難点の一つである。道三（一渓）のキリスト教入信問題や、『医学天正記』の書誌的検討など、考証に今一歩の厳密さ

が望まれる部分もあり、今大路家文書には未検討の史料が相当量残されていると思われる。それら、著者の今後に期待する所は少くないが、多年にわたって医史学の研究に精進し、西洋医学史に比して研究の進捗が遅れている漢方医学史、とくに後世派医学の歴史的位置づけを長足に前進させた著者は、文学博士の学位を帯びるに価いする業績をあげたものと判定する。

昭和五六年三月八日

論文審査担当者

主　査　慶応義塾大学文学部教授　中井信彦
副　査　順天堂大学客員教授　小川鼎三
　　慶応義塾大学文学部教授　河北展生

昭和五五年度三田史学会大会報告

昭和五五年度の大会は左記の通り開催された。今回は本会機関誌「史学」第五〇巻刊行を記念するため、特別のプログラムが準備された。また、昭和五四年度より設置された民族学・考古学専攻を中心に、民族学・考古学部会が加えられた。

一、期日　昭和五五年一二月六日（土）
一、会場　本塾三田校舎

研究発表

国史部会

1　違勅罪について
　　慶応義塾大学（大学院修士課程）長谷山　彰氏
2　キリシタン宣教師と文禄・慶長の役
　　慶応義塾大学　柳田　利夫氏
3　幕政史における宝歴8年の意義
　　慶応義塾志木高等学校　山田　忠雄氏

東洋史部会

1　イルハン朝史料にみえる ungu-bogol について
　　慶応義塾大学（大学院修士課程）白岩　一彦氏
2　高麗朝外官制に関する一考察
　　―高麗前期の防禦使をめぐって―
　　慶応義塾大学（大学院博士課程）小見山春生氏
3　南宋の役法と税法　　千葉工業大学　長谷川誠夫氏
4　ユーハンナー・ブン・マーサワイフの医学の箴言について
　　慶応義塾外国語学校　稲葉　隆政氏

西洋史部会

1　前四六二／一年前の国制におけるアレイオス・パゴスに関して　慶応義塾大学（大学院修士課程）中山　幸夫氏
2　近世初期における南西ランカシャーの石炭業
　　―バンクス家に見る地主の炭坑経営―
　　慶応義塾大学（大学院修士課程）高橋　裕一氏
3　マッツィーニ
　　―「青年イタリア党」創設期における政治論の展開―
　　慶応義塾大学（大学院修士課程）鈴木　邦夫氏
4　シュジェ・ド・サン＝ドニの修道院統治について
　　鹿児島女子大学　小崎　閏一氏